

●高澤良一 第九句集 寒暑

●七月―九月

微風湧くなり朝顔の瑠璃の淵

妻との旅すぐにまとまる麦落雁

馬うまづら面剥の外れに外れたり左右の眼

お披露目のごとくヨットの快走す

昔日の海向日葵の瞳の中に

雨降嶺を唐竹割にはたた神

炎昼の干鱈の茶漬かつ込めり

孫おなごなるもなんと蟻に極刑加えをり

口染めてきんとと色の氷水

両手もて孫の扇げる団扇風

夏旅プランお岩木に寄り龍飛に寄り

旅のプランじょんがらを聞き海鞘突つつき

電話繋がりにりんごの弘前観光課

ねふたの件でおたづねしますと電話口

山車神楽鉦は痴人トンチケンテコ愚鈍と

眼をばちくりさせて見送る武者倭武多

ヤーヤドー倭武多は鬼火搔き立てて

しずしずと見返り天女遠退ける

扇おぎどろ燈籠の熱気にゆらぐ立見客

羽後の空深く竿灯黄金咲き

竿灯の灯の川絶えずゆらぎゐて

灼けてをりお岩木行きのバスダイヤ

青新種の紫陽花勝出回ればったあぢさゐろーとるがいい老頭児には

のうぜん花掃きしばかりの地を汚し

蛇を見し胸の早鐘鎮めをり

水馬つと奔流に打って出ぬ

蛇莓採など真似てせぬものぞ

手仕事にふんぎりつけてさくらんぼ

眼鏡置き眼休ます雷の中
くわばらと云ひて遠退く雷ならず
あぢさゐのうすぼんやりと末路のはな
昼寝して雲散霧消時の枷
それ以上蛇を深追ひせぬがよき
炎暑あゝ年金生活者に貯金下ろすは砂取りゲームに似
熱帯夜一服つけんと起き出しぬ
夜の卓蟻でも歩いて居らぬかや
映画館出て馬車路の男梅雨
行先の皆目判らぬ蜷の道
雑兵のごとく駆け出すわらじ虫
平泳ぎのあととは出鱈目犬っ掻き
夏掛を一枚抱え漂流中
アイステイー茉莉モーリーチユンハオ春亭試し飲み
アイステイーストロ―吸うとき顔細め
炎ゆる日にふかすキャメルといふ葺
かなぶんの堂々巡りむさき家
虻一匹迷い込みたる音薄暑
老頭ろーとる児に浜屋顔が毎日咲き
風鈴の音色乱打に変わりけり
杜に棲む巢懸け鴉を皆敵視
胡桃民宿の女将披露割るそん八丈島で夕立のことを斯く云へばなやり方あったのか
明日葉を嬉しがらせる所降
男梅雨吉良の仁吉の一節を
新橋の飲屋の裏路地走り梅雨
麦湯の滋味吾らが元氣の源よ
起きだして朝から麦湯沸かす妻
ナツメロに夫婦してのる銷夏法
がら空きの電車ひやすに弱冷房
扇風機万遍なくといふことを

お化け小屋呼び込み男の甚平着
度忘れを暑のせいにするよくあること
いつもならかなぶん翔んで来べき頃
風鈴の手持ち無沙汰といふ風情
高からぬ鼻も汗かく日なりけり
古団扇扇ぎ損ねて肋打つ
のうぜん花どうやらかうやら風が出て
蝉啼かぬ分だけ凌ぎ易きけふ
體に佳き麦湯毎朝沸かすなり
山頭火の本の中から遠くわっこう
痩せぎすの身なれど汗がなんぼでも
ビニール製団扇手首の疲れるよ
顔でも洗ひ直す暑さも極まれば
やりきれぬ暑さと己にこぼすなり
放つとけばころがり落つる汗の玉
麦湯呑み午から体力消耗戦
汗地獄それもよかろう徒食の身
この上はごろ寝に如かずこの暑さ
瘦っぽは病ひに勁し夏桔梗
夏桔梗あるべきやうはを自問して
夕かぜに息浅くつく夏の蟲
水撒いてやろうかほとぼり覚めぬ路地
読むことはここまでにしてあと昼寝
読みかけの本のほとりに三尺寝
昼寝して飛脚行き交ふ東海道
昼寝覚やつと合点のゆく風情
午睡より覚めしところへ水羊羹
昼寝覚潰れしこゑを立て直す
體には毒よと夏掛かけ呉れぬ
家居とは金魚うろちよろする構図

老體に近づく裸にも産毛
人前妻をもう憚らぬふかし諸
ふかしさる人諸なんつたつて戦中派
独立記念日空にポンポン爆ずものあり
此処にもや時流に乗らぬ水馬
まんじりともせざる夜の明けにいい蝉
野分あと街は輝く万華鏡
予報今年は見極め難ければ官えいと梅雨明言出す
奴豆腐ヤッコの上音頭とるのは花かつを
聞こえ来ぬ「暑つくるしいことはいや」
水打って木に葉に石に當たる音
たどたどしきにいい蝉の節廻し
枕辺に団扇やりきれなき一夜
投げ出しある団扇を掴みざまあふぐ
悪態つく子鴉近所の電柱に
近所まで出張り鴉の御曹司
あつさりと白旗掲ぐ甚平着
酔ふたればチャンスとばかり蚊の寄り来
電話口孫出てあうむ返しの暑
腸妻によき献立牛蒡一点張り
畳の目見遣り睡後の漂流感
おお何と酸っぱ杏に瞞されし
杜の子烏通行人を小莫迦にす
灯が貧しく見えて西瓜の種わびし
落雷を逃るゝための唱えごと
皺む腹甚平におし包みけり
コンビ町内の祭りニも町内の裡御神燈
走り根を除けて夜店を組み始む
夜店建ちけふの稼ぎを待つばかり
金魚屋の親爺の顔も一とせぶり

祭寄付受付すずかぜ来るところ
玄関に子供神輿の祝儀置き
祭来るそれを目当てに孫が来る
飯店の円卓扇子を遣りながら
世直し横浜国際花火大会のつもりの花火がドカドンと
どんじりに控えて音も凄花火
青天の霹靂とはこれ蟬の尿しと
よき智慧が泛かばぬ道理この暑さ
夏掛てふ健気なるものうち被り
ピザ・パスタ何にでも合ふミニトマト
みんなは途中で止めてしまひけり
俳諧は肚はらでするもの冬瓜汁
蓮根の俳画懸け暑を煙に巻く
冷房のどすんと入る音の又
なるやうになれとはだけて夕端居
灸花首を傾げて見る人も
暁齋の百鬼夜行図お涼し
烏瓜の花煙幕を張りにけり
藺枕をひよいとつまみて頭かしらに当て
入れては切り病院、大部屋いたちごっここの部屋冷房
はたはた翔つさうかと云ってやりたくなる
始めて鳴く蟲と思へず達者なもん
夏掛の引っ張り過ぎを押し戻す
冬瓜料理病院食に何處か似て
昼寝せん頭のもやもやのとれるまで
総体にとぼけた味の冬瓜汁
汗拭いて縦に走れる手術痕
百日紅詩は独断と心得て
万太郎の前書きに似てつくつくし
頷いてばかり大暑の電話口

昼寝覚てのひらの斯くやはらかし
夏バテの我が身思へば酢豚など
夏掛を優にはみ出す足二本
すててこで古本整理あきたな汚
甚平に捌けて口調も応対も
つくつくほうしつくつくご飯がもう済んで
やるせなし麦湯に氷片二つ入れ
藺枕孫を投げ出すそこが仮寝所
お昼寝の済みしばかりの目の坐る
重ねある中より軽めの団扇選り
ラジオ體操老人にこそ夏休
靈者天国よりの盆帰省らに盆の改札生まれり
赤帽嗚呼東京駅のポーター徘徊驛薄暑
赤レンガ驛より阿房列車発ち
滴れり三葉虫の潜む岩
高張のずうんと高く蜂須賀連
沿道に汗を振りまき阿呆連
綺麗どころ前面に立て殿様連
阿波踊目抜きにかかりハイヤットサ
阿呆連奴踊りにくったくた
飛び込んでもう止められぬ阿波踊
阿波女踊り手付きが身上よ
水飴のやうに伸す腰阿波踊
男踊り日本一の尻ばしより
文月の投句句数揃えに雨の日當て
一切は過去と云うても震災忌
暑ければ頭に負担なき戦記物
団扇風眠気しりぞけしりぞけて
戦艦の一部のごとき蝉の胸
蝉の胸部時計の内部に酷似して

夕立後のごとくすかつとしてゐたし
ほゞづ鍋木清方き揉む女の手許よく描けて
何云うてもみんな言訳団扇風
朝曇さきほど薬飲んだっけ
蠅叩く術練達にまだ遠し
夏枯れの詩囊繕ふ術知らず
夏バテなし漫画を糧の青年は
なぐり描き劇画のやうな驟雨くる
パネルジン効き過ぎ水腎症の夏
前後して友の逝くなり蟲ほほづき
玻璃の蟬腹部まじまじ見られをり
辞書は机上に開きおくもの秋初風
手にとる本手にとらぬ本秋隣
余分なことばかり考えゐて晩夏
おとぼけの花火も交じる前半部
ぶりかえす暑に打負けて易きにつく
山妻の暑さ凌ぎはコップ拭き
一わたり西瓜の種をうち眺め
三井寺歩みいでらごみむし行虫訳も分ならず詠んでみぬ
ここ迄と長夜の本の耳を折る
西瓜の種一つ鎖骨に付いてをり
頭の裡に樟脳舟を走らしめ
この木さしづめ蟬の井戸端会議の木
ぶだう食ひ見合はす顔のちよと酸っぱ
ずいぶんと泳いだつもり本人は
ここ迄が咄のさはり幽霊譚
関節を鳴らしてみせぬ端居人
片脚のかがんぼ悪びれてはならぬ
出来不出来は西瓜の胴を叩き聞け
凄いののはこれから先よ稲つるみ

冷凍みかん齧り旅路の汽車ぽっぽ
胡麻餡の油湿りの月餅食ぶ
素裸に電極五箇所心電図
黄昏れてくるまでビール我慢しぬ
蒸す一夜唄が洩れ来て「碌でなし」
朝曇り気概ばかりが雄々しくて
屁理屈の罷り通らぬ油照
真綿締め大蛇おろちのごとき暑さとも
浴びせかく野次のやうなる暑さとも
詐欺に遭うやうや猛暑に出合へるは
頭のうへ酷暑の通り過ぎるを待つ
暑さにも十両級と横綱級
水打つて収まるものを収まらず
胡座かきそこに居座るとっこい暑
やう妻やうに暑さ収まり厨ごと
朝曇り鈍く光れるドアのノブ
どうやらけふは暑くなりさう番茶の香
法師蝉薄荷のやうに頭に沁み来
正調といふべき蝉に耳を藉し
朝蝉のしゃんしゃん手拍子足拍子
ご近所を騒がす蝉も一頓挫
軒へ蝉早速鳴いてみせにけり
落蝉にいつもの空があり真青
引継もいと簡単に楠の蝉
熊蝉の熊坂長範啼き出すよ
お騒がせしましたと蝉木を離れ
遠き蝉さらに遠くを風吹けり
落蝉の落ち方むろん頭から
脱藩者めく蝉街道外れて飛ぶ
けふの無事告げ合ふごとく蝉啼くも

蝉音絶ゆ木が悄然と佇つてをり
公園の広場を蝉のまっしぐら
就中意味あるやうに蝉の啼く
鳴く番がなき啞蝉とやがて知る
啞蝉の羽音ばかりが大きくて
晚酌や蝉音遠のくばかりなり
青空がずり落ちて蝉転落死
あらぬこと考えて蝉、音の鈍る
頼むからもそつと抑え啼けよ蝉
法師蝉出だしもたもたして居りぬ
先客にとまどひながら止まる蝉
哲人の風貌しかと蝉の面つら
行きずりの松から転倒したる蝉
リズム三門博よく蝉の唄入り観音経
捻ビス子埋手術痕ずむ胸の手ざはり遠き蝉
いたづらに力んでみせる蝉は野暮
夕栄えも手伝ひ蝉の愁嘆場
蝉しぐれてふ特大の坩堝抜け
団扇絵に街道あるく馬子と松
団扇持つてあつちの部屋からこつちの部屋
蠅取紙詠める世代を同じうし
扇風機の風が洩れなく来るやうに
気っ風よき啖呵のごとき涼気とも
湯上がりのすっぱんぽんは佳かりけり
夏瘦の腕ただ組みて無為無策
風鈴のただ働きの労おもふ
娑婆といふ紅蓮を堰きて網戸あり
シャワー浴ぶこんなところに雀斑かな
一日了ふ壘の麦湯も底尽きて
虫を聴くゆとり生まれぬ夜風のなか

煮立つたる麦湯さましてゐる背中
麦湯なまぬるくひとりでとる昼餉
舌先が莫迦になるまで氷水
汗かかぬ魚を羨しと見てゐるも
永久に拭く汗の貌ともおもへりき
汗拭いたへて須臾の間仏がほ
汗かくだけかいて魂すっぱぬけ
身を離るときの快感汗の玉
汗は先づ顔から噴くもの探し物
意気上がらぬ世嘆き蝉もこんな調子
ゆくゆくは樟脳舟の船長に
金魚屋の二軒張合ふ祭かな
昼寝して我は当家の山頭火
昼寝覚出づる言葉のあぶくめく
胸中に小さき虹懸け三尺寝
昼寝して恐竜の影よぎる夢
昼寝して手足遠のく心地せり
着てみせて旅装のきまる日焼妻
軍神は茂みに佇てり忠魂碑
蚊の敵機来襲されば返り討ち
万歳をして落つ蝉の手をそのまゝ
たまさかに聞く鳥の音も日の盛り
日盛りをあれもこれもと欲張らず
一切の小細工無用いわし雲
打って出るおもひ強かり炎天に
立つ虹に見合つた言葉ぽんと出で
洒落て詠む気などさらさら竹酔日
引とり手なき古本の旱山
端的と云ふは夕立の上がり際
降って湧く涼しき風を待ちゐたり

虹のこと古事類苑の天文部

実家にて油売りくる日焼妻

人の手のかからぬ*乱開発 道路然り用水路然りものはなし夏野

へうと水のみに起ちたる生身魂

芋殻火吹く風のうごきを見てゐたり

病人の吐き出す枇杷の種大

亀相して濡らせる西瓜臭き胸

ナフタリン臭きアロハに手を通す

胴廻り一寸足りない海水着

ピンボケの柄のアロハをことしも着て

曙いろダチュラ大きく開けゴマ

驚き逃ぐ蟬の尿浴び「まあいいか」

飛行法伝授させたき蟬のあり

向日葵の花より茎のヴァイタリテイ

底紅やうち籠るべく家があり

苦瓜をどうするでもなく置く机上

サルビヤに真っ赤な風が起つところ

底紅に胸なでおろす風が出て

零れたる西瓜の種は躑好き

疎まるゝことに馴れつこ灸花

目覚むれば妻も目覚むる曉の虫

かがんぼの暢気な父さん歩きせり

俳諧の手ほどき蠅虎より享く

集たかり屋の蟻を不埒といふ勿れ

強さうな名のヘラクレス大きくわがた

車旅の車中内放送男鹿のどしやぶり雨告げて

「かもしか」の運転席のいと高し

夕立のざつとありたる雄物川

夏の男鹿すな*すなぶけは皺寄る おどは年寄ぶけおどのバスガイド

清浄と男鹿の青田に注ぐ雨

半ズボンにて夏の男鹿巡るべく
男鹿温泉[○]ポン[○]ポ[○]ン[○]ダ[○]リ[○]ア[○]が咲いてをり
待宵草林立石油備蓄基地
女川^{おながわ}の優しき波に泳ぎけり
照^{門前}りつけて男鹿の瘤鯛揚がる海
岩牡蠣の岩場の向う遊び舟
門前のさざえあわびの岩場かな
寒風山蹴飛ばしハンググライダー
首蓆に憩へるハーレーダヴィトソン
なまはげの汗だく学生アルバイト
点^{秋田}り初むコンビニの灯と竿灯と
蓮田の彼方竿灯点り初め
竿灯の油断大敵ふいの風
竿灯は大きく宙を一泳ぎ
竿の癖よく読み竿灯あやつれる
自衛隊日の丸竿灯ゆうらゆら
どうだいと云はんばかりの大竿灯
ところてん製造元の竿灯なり
竿灯の一艘一艘すすむごと
竿灯の均衡破れ走り出す
竿灯のどう傾くかスリリング
転け竿灯面目なしと起ち上る
ビール^{土崎}ますますうましアンデスポテトも又
八月のフェリー向かふは苦小牧
待宵草鳥海丸は繋がれて
はまなすの実の生る頃の密航者
甘草^{五能線}咲く墓地の後を五能線
日本海前に青田のしんと澄み
五能線田母木に夕立ちうちつけて
艦^{へなし}作経て深浦辺りで虹を見ぬ

五能線浜で手を振る浮輪の子
夕立に叩かれめちやくちや日本海
五所川原おもじろの面白女武者ねぶた
朝市の婆の勧める早生りんご
天を衝く北の守護神立佞武多
立佞武多近づけば子をてんぐるま
青りんご青田青風岩木山
りんごお早うお岩木お早う旅早立ち
お岩木岩木山神社の真清水引きて御神水
お岩木百沢温泉の手水の真清水手に痛し
日盛りの出湯に血行よくなれり
青りんご葉隠れお岩木雲隠れ
お岩木の日照雨を弾く青りんご
お岩木に雲又かかる青りんご
青りんご薄光りせるおでこかな
お岩木の日照雨に馴れっこ山の蟻
旅先の風の津軽の氷水
お岩木高照神社は雲のスカート履き夏野
この奥山唄に津軽家霊屋姥百合咲く
ねぶた見る津軽民謡酒場にて
旅人も声を限りのヤーヤドウ
津軽公御紋牡丹の炎のねぶた
見送り絵小雪舞はせて雪をんな
鏡絵の関羽だんびら振りかざし
溜息を誘ふ鏡絵九紋竜
見送り絵常磐御前の被りもの
鏡絵に武者の素っ首十あまり
鏡絵のこの透明は何處よりくる
鏡絵の女美丈夫太刀かざし
鏡絵の大蛇は青く鬼赤く

跨り打つ倭武多太鼓の撥の反り
子供ねぶたヤーヤドウのこゑ絞る
扇おぎとろ燈籠の紅蓮見送り立ちん棒
ちびっ子の手に手に金魚ねぶた提げ
雲漢へ飛ばされさうに大太鼓
白眼の張飛関羽の武者倭武多
婆と孫やんやのピカチュウねぶたかな
うつしみの顔へねぶたの灯の透けぬ
旅をして夜毎のねぶたねぶたかな
夏三内丸山遺跡鴉遺跡の丘に何漁る
屋根草も夏草のうち復原棟
車前草に覆はれ豎穴住居の丘
車前草踏み遺跡ガイドのボランティア
玉澤のずんだ餅目に涼しきよ
白玉や奥羽の旅はここに果て
盆踊ここでお仕舞い子供の部
一人脱け二人脱けして踊の輪
稲びかり天の裏側垣間見せ
夕立来て東京湾をぶったたく
一、二枚青葉飛ばして大夕立
夕立中健気なる灯の点り初む
雷公のもぐら叩きに遭ふごとし
秋雷の豆を煎るごと空ら響き
押入に片さるゝごと雷了る
また元の木に舞ひ戻る蟬のあり
今日やること薬のむこと汗かくこと
これといふ宿題はなし夏百日
茹で上がるもろこしの黄は僧衣の黄
晩涼の津軽じょんがら哭き三味線
彼林火忌の日のごと権兵衛坂は灼けをりぬ

日盛りを煌めき渡る風のあり
この通り孫に示す蝉は素手もて掴むもの
せみとらせてくださいと子の門に立つ
盆花の色よき花の取り合はせ
榊大樹果たして蝉はここに居る
蝉しぐれあたり暮れ来て先細り
蝉逃ぐるぶうんと熱き風起たせ
夕立の音の間合ひを詰め来たる
夕立にこりやたまらんと馳せる蝉
夕立来て地に喚くもの疾駆す
大翼たたむごとくに夕立熄む
蝉捕りの子を指図して通行人
転げ墜つところが墳や秋の蝉
垣内にずんと伸びくる捕虫網
昼寝より覚めてどこぞの馬の骨
脳震盪間違ひなしの蠅叩
喰はれたと妻の差し出すふくらはぎ
出し殻のやうな蝉の音絞りをり
夏冬は蝉鳴かないよという児の話といふ概念掴み始めし子話を耳にして
終戦日深くしゃがんで厠の蚊
白日傘行き交ふ新装大棧橋横浜港
大棧橋波をデフォルメして涼し
ホテルニューグランド前飛ぶ秋つばめ
オランダSCANDIAのビールさうだなハイネッケン
操舵輪壁に懸けあるピアホール
芋殻束半分残し霊迎え
門火焚く用意かさばるもの多し
芋殻焚き了へたる指の煙くさき
箸の水切って乾かす魂祭
焼茄子の直火強めぬ盆厨

扇面のをんな艶たる秋扇

桔梗の蒼の爆破遂げてをり

後かたづけやうやく終り手花火す

麻婆豆腐食うべ八月乗り切らん

夏枯れの糶場に口細鯨かな

騒然たる雨を嬉ぶ芭蕉林

吊革の揃って揺るゝ盆休

土用浪暫し泡沫漂はせ

青柿の雨滴ぴしゃりと浴びにけり

夏負けもせず来て蝦のチリソース

ひっぱたかれぺしゃんこの蚊の垢じみて

お諸蒸す土偶体形疎んずも

しじみ蝶一つは寂し二つある

地に沿ひて石ころ色のしじみ蝶

しじみ蝶庭の何處かに飛んでゐる

視野に入り視野を出でゆくしじみ蝶

孫おうむ返しに「せみさんしんでいる」

古書守金澤文庫 称名寺に暑いと云へばええ暑い

えのこ草コップに挿せば茎交叉

ポカやってもう追ひつけぬ浮輪かな

肺活量伊藤久夫大き歌手にて熊祭イヨマンテ

その上は華族の避暑地お宮の松

エゾオヤマリンドウ秋を告ぐ峠

火口湖へ降りゆく昼の秋あかね

八幡平夏の名残の梅鉢草

畚岳遠望りんだう咲く峠

アスピーテライン上りの草もみぢ

すすき番頭曰く見て露天湯に汗流されよ

まあなんて言おうかこの味むかご飯

コンビニで零余子なんぞを買おうとは

指立てて蜻蛉止まらず子の真顔
野趣溢る出湯は塩辛蜻蛉いろ
湯治小屋嘗て十六芒原
自炊棟ありし辺りは皆すすき
湯治小屋鑄び虎杖のその向う
露けかり自炊道具の料金表
湯治場に天下の一品山清水
風邪引かぬことが取り柄と湯治人
蠅叩持ちつゝ雑談湯治人
手に取りぬ何の鑄穂か判らぬを
自炊棟裏のすすきの花盛り
竜淵に潜む秘湯に四肢伸ばし
噴湯後生掛自然研究路ときにケコと蛙のこゑ出して
硫気浴ぶ芒たまったもんぢやない
へちやぽこと泥湯噴出薄の間
虫すだく坊主地獄の陥没箇所
草もみぢミニチュア火山の裾野にも
湯疲れ後生掛温泉や長き夜に倦み生あくび
ぎす鳴いて玉川温泉岩盤浴
湯治場の鑄び木杭に秋あかね
秋祭り山車の松前鉄之助盛岡秋まつり(盛岡八幡宮)
風流山車秋の八幡下りかな
風流山車出を待つわんこそば屋の前
冷酒ひゃにして口当りよき岩手川
わんこそば屋の二階に詰める祭衆
鹿踊諸流の中花巻まつりの春日流
風流山車見返し遠のく刈屋姫
鹿踊鹿八頭の揃い踏み
羅須地人協会跡地の鳥威し
赤橋既に土に帰し無しのまま賢治作りし弥助橋

花巻ノ雨ニモマケズ初鴉来

地酒酌む台温泉ばぼつけはのは佃煮肴とし

はあ、遠野むがしはと始まる民話露けしや

秋うらら河童と馬コの物語

遠野民話聞きある両の耳さやか

曲り屋の遠野民話の身に入むよ

寄ってってがanseと遠野の胡桃売り

鶏頭の頭かしら化け物めく遠野

かなながら*かながらははちぎれんはばはかり鹿踊木の削り皮

*雌鹿狂ひは一匹の女鹿を男鹿が奪い合う鹿踊の演目

雌鹿めじし狂おひ雄鹿おじし闘ひ倒れたり

しし踊りおはこ十八番柱懸りも演目の一つの柱懸りかな

腰ざしのゆらゆら奉納鹿踊

南部ばやし造花紅葉を稚児負ふて

鹿踊伝えて遠野十五ヶ村

河童が湊河童も秋思に耽るべく

蛇口より水の塊防災日

牢乎として櫂一夏逝かせけり

なほ翔びて縋るものなき秋の蝉

秋徼雨野草画展に長居して

須く太藺青天目指すべし

一日が了る麦酒の泡見つめ

ビールの泡鼻の辺りでぷつぷつと

新涼の燈台五十万カンデラ

これ当り諸は流行りのベニアズマ

彼岸花小石川植物園ツツカツンと咲きにけり

散らば高麗って散らば巾着田って日とまんじゆさげ

稲田描く油絵の具を盛り上げて

恵林寺に風のごと来て薄どき

一位の実熱血快川果てし寺

凡そ軍勝五分を以て上と為し・
木斛の大き実信玄戦陣訓

なほつづくコスモス街道ナイスデイ
家一つ毀たる跡に玉すだれ

あり合はせの芋の煮しめに一善飯

重くれるくわりんに月のまどかなり

月の前はばかり通る雲一つ

衣被剥きつゝぼやく何のかんの

土産の栗栗飯にしてなほ余る

しじみ蝶止まるまで見て草っぱら

きちきちの一途な翅音径外れず

蠟螂の三角の貌キューヴィズム

ぺしゃんことなりし秋の蚊塵と捨つ

萎びさす椽の実死蔵といふべきか

薊には棘あり用心してかかれ

果し合い活動写真のすすき原

烏瓜粹な青縞装ひて

間引菜に昼酒の箸上げ下ろし

鶏頭花空気違へば彩違ふ